

宝

宮本地車嘶



第16回「神々の活躍～日本神話～ 最終話」

さて、宮本地車彫物の日本神話の物語は今回で最終話となります。まず高天原から神が降臨し日本を治めに来るお話、小屋根小屋虹梁「天孫降臨」です。アマテラスは孫の邇邇藝命に天から下り葦原中国（日本の国土のこと）を治めるように命じました。邇邇藝命は葦原中国を治める正当な者の証とする三種の神器とともに5人の神様を従えて天下りしました。

道中、天と地の間の道が幾重にも分かれた場所（天の八衢）に誰か立っている者がいました。そこで邇邇藝命がアメノウズメに様子を見に行かせました。待っていたのは地上の神である猿田彦でした。サルタヒコは自身の名を名乗り、地上から天孫を迎えて来たといいました。サルタヒコの案内により一行は無事に地上の高千穂へとたどり着きました。



彫物にはサルタヒコが気を許すようにアメノウズメが胸をはだけ、サルタヒコへと向かう場面が刻まれています。



このことからサルタヒコは物事を良い方向へと導く神として祀られています。サルタヒコ神社は伊勢神宮の内宮のすぐ近くにあります。

「天孫降臨」から少し後の時代のお話。日本武尊の彫物は大屋根後面小屋虹梁「熊襲征伐」と車板「草薙劍」に刻まれています。「熊襲征伐」は父から朝廷に従わぬ熊襲建という首長を討てとの命を受けた小碓尊（タケルの幼少名）が無事に熊襲を倒す物語です。小碓尊は出発の際、叔母の倭姫を尋ね女性の着物を借りていきました。そして女装し熊襲の館の新築祝いの宴に紛れ込みました。そこで酒に酔った二人の熊襲建を討つことに成功しました。この際、弟の建が「大和の国にはなんと勇猛な方がいる。敵ながらあっぱれ。私達兄弟のタケルという名を献上いたします。」と言いました。この時から小碓尊はヤマトタケルと名乗るようになりました。



「熊襲征伐」西国熊襲は九州の熊本から鹿児島の辺りの地名で熊襲建は二人いて同じ名前の兄弟です。

「草薙劍」この戦いの地は野を焼いたことから焼津と言われるようになりました。

さて、熊襲から帰ったのもつかの間、タケルは東国の平定を父から命じられます。叔母の倭姫にそれを話すと倭姫はタケルに天叢雲剣と小さな皮袋を受けました。東国へ進んだタケルは國造（地方の支配者）の罠に陥り四方から火を放たれ焼き殺されそうになってしまいました。そこで倭姫からの袋をあけると中には火打石が入っていました。タケルは天叢雲剣で草を薙ぎ払い火打石で火をつけ迎え火を行いました。これにより迫り来る火を食い止めて無事脱出することができました。天叢雲剣が草薙剣と呼ばれるようになったのもこの事からです。